

画家

宮武貴久恵さん



市内在住の画家・宮武貴久恵（本名 佐野貴久恵）さんは、ベルリンの壁崩壊直後の1990年に行われた、東ベルリンに残された壁の一部に世界中のアーティストが壁画を描くプロジェクトに、日本人で唯一参加しました。

幼少期から絵の才能を発揮

4歳の時に、母の勧めで絵を習い始めました。7歳の時に、当時住んでいた北海道で開催された大人も参加する美術コンクールに応募したところ、最年少で入選を果たし、メディアでも取り上げられました。

学びたいという強い思いで単身ニューヨークへ

絵で食べていくことは大変だと思い、芸術系の大学には進学しませんでした。四日市で開催されていた「東典男」の個展を訪れた時に、東さんの「ニューヨークは次元が違う」という言葉を受け、どうしてもニューヨークで絵の勉強がしたくなり、24歳で単身渡米しました。

美術学校では、朝から晩まで絵の勉強をし、さまざまなことを吸収しました。当時は印象派の絵を描いていましたが、師事したいと思っていた先

生が亡くなってしまいました。途方に暮れていたところ、抽象画の先生からの「既成概念にとらわれず、自由に描きなさい」という言葉に感銘を受け、抽象画の絵の道に進むことになりました。

絵が見つないでくれた縁で、プロジェクト参加へ

在学中に、自分の作品を購入してくれた人がいて、そこから人づてに評判が広がり、ドイツのフランクフルトで個展を開くことになりました。それがきっかけで、ベルリンの壁に描くプロジェクトに参加しないかと声を掛けられました。絵が人との縁をつないでくれたと思っています。

1.3kmの壁を、1人10m程度の間隔で分け、絵を描くというプロジェクトの規模の大きさに、日本とは違う文化の厚みを感じたことを覚えています。

当時、壁は崩壊していたものの、街の雰囲気や人々の暮らしは分断中と変わっていませんでした。毎朝検問を通り抜け、食事のままならない中、一人で灰色の壁に向き合い描き続ける過酷な日々でした。でも、この閉ざされた世界で28年間も苦しみ続けた人たちのことを思うと、「描き切らなければ」と強い使命感が芽生えました。また、自分が描きたいものを描くだけでなく、ベルリンの街に溶け込み、歴史に残すということを意識して制作に取り組みました。

「誰かのために」が原動力に

昨年9月には、ベルリンの壁崩壊35周年の式典に出席し、記念館に新作を贈ったほか、スピーチの機会もいただきました。

プロジェクトを通して、これまで何度もベルリンを訪れ、さまざまな人たちと出会い、沢山の仲間たちと一緒に歴史を歩み、素晴らしい時間を過ごしてきました。

そんな仲間が立て続けに二人亡くなってしまったことがスピーチを引き受けた理由の一つです。「壁画を描いた仲間の中には、亡くなった仲間もいるが、分かち合った魂はこの壁に息づき、未来へ受け継がれていく」という思いを語りました。

さまざまな人たちの支えがあり、このような大きな舞台に立つことができたと思っています。プロジェクトに参加した時も「自分のためではなく、誰かのために」という思いが原動力になり、自分のキャパシティを超える力を出すことができたのだと思っています。



幼少期の作品



ベルリンの壁に絵を描く宮武さん
(1990年当時)



式典で新作を贈る宮武さん

8月放送のCTY-FM「よっかいち わいわい人探訪！」でも紹介します。(放送時間は裏表紙へ)